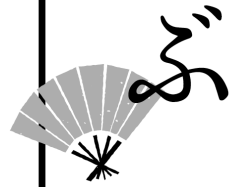


古典落語



に学



落語家
立川談四楼

第三十五回 長屋の花見

大 おお

家さんから長屋（集合住宅）の衆全員に呼び出しがかかった。大方が店賃（家賃）を溜めていて、少なくとも催促、悪くすれば出て行けと言われるかもしれないと、連中は恐る恐る大家さんのもとに集まります。

ところが大家さんはご機嫌で、ニコニコしている。

「みんなよく来てくれたな。この長屋は世間で貧乏長屋と言われていた。あたしゃ悔しくて仕方がない。そこで一同打ち揃って山へ花見に出かけ、世間をアツと言わせてやろう。酒はこの通り一升瓶が三本。重箱の中をくらん、かまぼこに卵焼きだ。おっと心配するな、これはみんな私のおごりだから」

たちまち上がる大歓声。そりゃそうでしょう、店賃のことで

はなく、すべての費用は大家さん持ちで花見に出かけようというのですから。

かし世の中そんなに甘くはありません。実のところは、

一升瓶の中身は酒ではなく番茶を煮出して薄めたもの、かまぼこは大根のこうこ（漬物）で、卵焼きの正体は黄色いたくあんだったのです。

宴席で一同はたちまち意気消沈、およそ氣勢が上がりません。大家さんがせめて高台から花を見ようと言うのですが、「いや下の方がいい、下にいりゃ上から何か食い物が落っこってくる」などと言う始末。

大家さんが長屋の衆に再び言います。

「気は持ちようだよ。こっちが気分よく盛り上がれば、周りから見たら酒盛りしているように見えるもんさ。さ、盛り上がる」

長

屋の衆は楽しそうに振る舞うのに四苦八苦です。

「さ、今月の月番。おまえがまず飲みな」

「へい、いただきます。さあ酔った！」

「いいぞ、その調子だ」

「オレは酒を飲んで酔ってるんだ！」

「いちいち断るなよ」

「醒めた」

「早いな」

「そりゃそうです、お酒でなくお茶だもの。だけど大家さん、こりゃ上等の酒です。どこのもんです？」

「いいことを聞くな。これは『灘の生一本』だ」

「灘ですか、あっしは宇治かと思った」

「誰かかまぼこを食いな」

「ありがとうございます。これはあっしの好物でしてね、これの千六本の味噌汁はうまいっすよね。胃の具合が悪いときはこれをかまぼこ（大根）おろしにして」

「いい加減にしな。熊さん卵焼きをお上がり、うまいぞ」

「へい、いただきます。おい八つつあん、そのうまそうな卵焼きを取ってくれ」

「いいぞ、ほら周りのみんなが見てる」

「おっと、その尻尾でねえとこ」

どうにもチグハグでうまく盛り上がりません。すると一人が大きい声で言います。

「大家さん大家さん、近々この長屋にいいことがありますよ」

「嬉しいね、どうしてだい？」

「ほら、茶碗の中に酒柱が立ってます」

いオチですねえ、酒柱とききました。もちろん茶柱の洒落ですが、茶柱が立つといいことがある、との縁起からきています。

上方落語の『貧乏花見』が明治期に東京に伝わり『長屋の花見』になりました。

花見の場所は演者によってまちまちで、上野、飛鳥山、御殿山、墨堤（墨田川）辺り、桜はソメイヨシノではなく彼岸桜だったと考えられます。

演者も多く、演出もさまざまで、長くも短くもできるので、春が来ると桜前線が南から始まり北海道に到達するまで演じられます。

『銭湯で上野の花の噂かな』は正岡子規の有名な句ですが、これだけを言うから、スツと噺に入るといふ粋な落語家もいます。